【研究主題】　思考の流れを止めない学びの実現
【副題】１年生における ICT 活用の可能性に迫る

【所属校名】　滋賀県彦根市立稲枝東学校
【職名・氏名】　教諭　　平岩　優佑

＜主題設定の理由＞

これまで ICT 推進リーダーとして、校内での活用を訴える中で、私には一つの葛藤があった。その発端は、「１年生では、ローマ字入力ができないから端末は使い辛い。出し入れにも時間がかかる」という声だった。私は、半ば納得しつつも、反面何でも意欲的で吸収能力が高い低学年こそ、ICT を効果的に使いこなせるはずであると考えた。もちろん、１年生は読み・書き・計算の基礎基本の力を育まなければいけない。そこで、児童の「なぜ？」「考えたい！」という自然な声をもとに学習計画を立て、資質能力を獲得する過程の中で、文房具と同じように ICT を用いることにした。また、教科の時数の中でも、十分に端末の基礎基本的な技能はもちろん、情報活用能力も育成できると考え、主題を設定するに至った。

＜内容と方法＞

本校異動１年目の年、１年生の担任を任された。本実践において、まず行ったことが「児童が安心して端末を使える環境づくり」である。

- 端末活用についてのルール作り…児童にとってなじみのある「たこやき」をテーマに約束事項を設けた。児童がいつでも思い出せるように、たこやきのぬいぐるみとともに、教室掲示を行った。
- １日のルーティンを固定する…児童は毎朝、保管庫から端末を取り出し、自分の手元に置く。帰るまでには保管庫に戻し、充電を行う。流れを固定することで、大きな混乱を避けることができた。
- 共通言語をつくる…端末を操作する際、児童にとって難しい専門用語が出てくる。そこで、「お休みモードにしよう」「回れ右するよ」「赤ちゃん抱っこで持っていくよ」など、分かりやすい言葉を児童と共有した。この取組は、今後の学習の展開を考えても、大変効果的であった。

次に、具体的に学習の中で端末を用いた。複数の教科で活用を図ったが、本実践では、特に「国語科」に焦点を当てた。また、活用に際して、授業支援ソフト「ミライシード」を活用した。操作性が簡単であり、活用の幅が広く、大きな教育効果をもたらすと考えたからだ。

実践①　「操作に慣れる」

国語科「くちばし」の学習では、児童が教科書教材を学習した後に、自分が選んだ鳥のくちばしを紹介する。その際、事前に様々なくちばしのデータを端末の中の共有 BOX に入れておいた。すると、いつでも・誰でも見たいときに、お気に入りの資料を見ることができる「デジタル図書館」が完成した。児童は巧みに資料を大型テレビに写しながら、発表することができた。

実践②　「学習の中で活用する」

国語科「うみのかくれんぼ」の学習では、本文を端末の中に入れておいたことで、児童は自分が気になる箇所をデジタル上で整理したり、文と絵を関連付けて考えたりすることができた。また、全体の考えを一度に共有することができるのも ICT の大きなメリットである。国語科「じどう車くらべ」の学習では、言語活動で用いるワークシートを児童が個別に端末を用いて、準備することにした。つまり、全員が同じプリントではなく、発表する際に示したい写真を個別に用意することができ、個別最適な学びへと繋がった。児童の意欲が高まったのは、言うまでもない。同時に、児童が作ったワークシートを一括して印刷することで、教室掲示に利用することもできた。国語科「ものの名まえ」の学習では、お店屋さんごっこを経験した。端末を利用して、友達にカードを送り合いながら、売り手・買い手双方の適切な言葉を獲得することができた。

＜成果と課題＞

児童に端末の技能面に関するアンケートを行った。すると、19 の質問事項の内、ほとんどの問いで肯定的意見が 100％だった。「端末を使っての学習は楽しい」「よく分かる」という問いでも、驚くべきことに 100％の児童が「そう思う」と答えている。つまり、ローマ字入力ができないとしても、児童が確かな自信をもって、学習の中で効果的に端末を活用できた結果と言える。この実践において、低学年、特に１年生に端末を活用させるためには、安心感のある環境づくりを整備すること、具体的な学習のカリキュラムの中に、端末の操作技能と情報活用能力の獲得を位置付けること、そして、児童の可能性を信じ、広げること、そのために児童の思い・期待に積極的に応えることが重要であると明らかにすることができた。